

令和7年度 校内研究報告書

小学部3教室

(Ⅰ課程、ⅡA課程、ⅡB課程)

Ⅰ 研究内容

3教室では、通常3名の職員が教室内で支援を行っているが、療育医療センターでのベッドサイド授業がメインになる児童の担当も含め、4名の職員で、児童の実態や課題を共有し、学習内容や教材等について意見交換を行っている。経験年数のバラツキにより、職員間で知識量の差や、経験から身につく児童の成長の見通しに差が見られた。そこで今年度は、経験の浅い職員がもつ指導に関する困り感や相談に対するアプローチに焦点をおき、「学級職員間のサポート体制」をメインに取り組んだ。

5月・6月は、自活の流れ図や指導計画の使い方を確認し、なっ

短期目標及び今後の指導についての案を共有し、困り感のある職員に対してアドバイスをしたり、意見交換を重ねたりした。その中で、自立活動で児童にコミュニケーションの力をつけたいが何をしていいかわからないという相談があった。それに応え、経験を積んだ職員から、児童のコミュニケーション能力を伸ばし表出させるためのツールとして、PECS の存在や使い方を伝え、PECS の使用が開始した。

絵カードは、バラで使用するのではなくまとめてファイルにし、実際に児童のコミュニケーションをとる際に活用した。使用開始頃は登校や自活の時間で使用し、繰り返し使う内に興味を持って取り組むようになった。活用する中で、使いづらさを感じる箇所や、改善の必要性を感じる箇所において、担当職員が自分で考えて工夫してみたり、先輩の職員からのアドバイスを参考に改善を行ったりした。コミュニケーションツールの改善としては、活用しやすいように、ガバツと開けるファイルへ変更し、使用する際の向きを変えることで見やすくした。また、動詞や感情に関する言葉など、使用する言葉を増やしていった。その際、将来を見据えて今後 ICT 機器に移行しやすいように、タブレットのアプリで使用されている PECS のイラストでカードを作成する工夫をした。

Ⅱ 研究成果

PECS を、表出の手段のみでなく、今日の活動として教師が提示することで、児童が一日の活動に見通しをもって取り組むことができた等の、双方間のコミュニケーションとして利用できるようになった。また、伝わる喜びからどんどん伝えたいことを伝えるようになってきている様子が児童から感じられる。さらに、児童と他教諭とのコミュニケーションもとれやすくなり、知っている言葉も徐々に増えてきた。これらのことから、教師間サポートで得られた工夫・改善が、児童に還元されていることが確認できる。困り感を自分から積極的にアドバイスを求め質問したこと、それに応えて先輩職員が分かりやすく説明したこと、さらにそれらのアドバイスをすぐに反映させ、教材をブラッシュアップしていったことが、より良い教材の改善や活用、適切な指導につながったと考える。

また、校内研修の中で、高等部の先生からアドバイスをもらい、教材の改善を行った。貼り付けるバーを用意することで、「〇〇に行きたい」等、複数のカードを並べて二語文の表現ができるようになってきた。学部を超え、より広い視点からのアドバイスをもらうことができたことは、成果であった。

Ⅲ 研究課題(今後の取組)

今年度、担当教諭自ら工夫したり、アドバイスを受けて指導の改善に取り組めたりすることができた。今後メンバーが変わっても、職員一人ひとりの意見を交換しながら、学級職員の指導力を継続して底上げしていくことが今後の課題となる。また、アドバイスをする側には、教師の経験に合わせたアドバイスの工夫、アドバイスを受ける側には、受けたアドバイスを自分の中で消化し実行する力が職員に求

められるだろう。そのために、指導の見直し改善の土台となるツールとして、自活シートを継続して使っていくことが考えられる。職員の意見交換から導き出した指導の方向性を見直しや学習内容の変更・改善を反映させ、自活シートに朱書きで書き加えていきながら、PDCA サイクルを回すツールとして活用していくことが、今後のブレない体制の構築につながると考える。